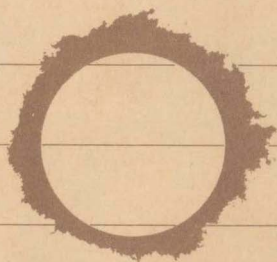


パリ燃ゆ 1

大佛次郎



朝日新聞社

大佛次郎（おさらぎ じろう）

本名、野尻清彦。1897（明治30）年横浜に生まれる。東大政治学科卒業後、外務省勤務などを経て文筆業に入る。戦前戦中戦後を通じ、時代小説、現代小説、ノンフィクション、戯曲、童話にいたる幅広い分野の名作を世に送り続けた。代表作としては『赤穂浪士』『霧笛』『帰郷』『パリ燃ゆ』などがある。ライフワークとも言うべき『天皇の世紀』を朝日新聞連載中の1973年、75年余の生涯を終えた。

パリ燃ゆ 1

昭和58年1月20日 第1刷発行

定価 440円

著 者 大佛次郎

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© MASAKO NOJIRI 1983 Printed in Japan
0193-260911-0042

ハ、リ燃ゆ 1

大 佛 次 郎

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

第一部 V・ユゴー

サン・ドニ美術館 9

村の娘 21

巴里 33

その朝 46

レ・ミゼラブル 61

暗い眼 90

夜の事件 104

旋風 136

追放と亡命 150

第二部 ナポレオン三世

美しきパリ 169

紫陽花 182

V・ノワール事件

195

影の部隊 209

底 辺 222

奔 流 235

奇妙な戦争 249

からまわり 277

三すくみ 291

バゼーヌが、そこに

306

パリ
燃ゆ
1

第一部
V・ユゴー

サン・ドニ美術館

1

サン・ドニの小さい町はパリの都心から北、十キロと離れない郊外に在る。ここの美術館にパリ・コミュニケーション関係の画があるので見たいと思った。

モンマルトルに画室を持って、制作をしている荻須高德氏が、サン・ドニの美術館の館長と懇意なので連絡を取ってくれた。あいにくと、美術館ではタピスリの展覧会を催していて、平常見せている画を倉庫にしまっている。しかし、訪問の日時を決めてくれれば庫から出して見せてくれると親切な返事であった。

私は日を約束してから、スペイン、南仏を歩いてまたパリに戻って来た。帰国の旅客機を一週間後に予約してあって、いそがしい時の間だったが、サン・ドニ美術館の画だけは是非見たく、すぐ荻須君に連絡した。荻須君も奥さんとブリュッセルの展覧会に行って帰ったばかりの時だったが、自動車を自分で運転して迎えに来てくれた。

「コミュニケーションの画って、どんな画があるのです？」

と運転台から荻須君が尋ねる。サン・ドニの美術館には荻須君の画が買入れられて飾ってあるのだった。

「どんな画って、」

私も返事に困った。

「僕もよく知らないけれど、コミューンを書いた本を見てみると、サン・ドニ美術館所蔵って註をつけた画がよく出て来る。ひとつだけ僕が覚えてるし見たいと思うのは、コミューンの政府のリーダーだったドレクリュウズの最期を描いたものですね。画として良いか悪いか知らないけれど、歴史的に見て重要なものだから。」

「描いた画家は誰なんです。」

「さあ、それも知らない。」

私は笑って弁解した。

「画家のあなたに案内を願って見に行くだけの画ではないかも知れませんが、だが、僕は見たいんです。」

王朝時代のセヴィニエ夫人の邸宅がパリ市の歴史博物館ミュゼ・カルナヴァレになっていて、コミューン関係の画もいろいろと陳列してあった。戦闘のスケッチ画のいろいろや籠城生活の情景の他に、社会主義者オギュスト・ブランキの肖像、コミューンの指導者だったジュール・ヴァレスの肖像などがあったが、この無名氏が描いたドレクリュウズの最期の画はここにはなかった。本で調べて見ると、サン・ドニ美術館の所蔵と記してある。無名氏どころではなく相当の画家、

それもあるいはコミューンの事変に立会ったか、當時に近い時代の画家が描いたものではなからうか？ 写真版で色彩のないものを見ても私が受けた印象は強かった。ひとつには画の主題に依る強さでもあろう。

2

シャルル・ドレクリュウズは一八〇九年の生れで共和主義のジャーナリストとして出発、王政下に革命運動を続けてから亡命、五三年に捕われて流刑、釈放の後にパリに帰って新聞「目ざめ」を創刊、ナポレオン三世の帝政の下でも数度入獄して、「目ざめ」は一八七〇年八月十日に発行禁止になったのを、屈せず九月にまた発行した。普仏戦争の敗北下に降服に肯ぜず抵抗運動を起し、やがて翌年にパリの市民政府の有力な一員となつて、外務委員、軍事委員、公安委員となつてコミューンを指導し、ヴェルサイユ政府の軍隊のパリ攻撃に対抗してバリケード（防塞）の作戦を指導し、官軍（勝ったから官軍に違いない）の正規軍隊の進撃を迎えて籠城したが、敵が市中に雪崩れ入り市民軍の最後の拠点を包囲して仮借ない砲撃を加え、敗北が争われぬものと成つてから彼はヴォルテール街の角にあったバリケードで倒れた。

後に不朽となつたコミューン史を著述したりサガレエが、このドレクリュウズの最期の模様を書いている。完全に武装したヴェルサイユ政府軍十三万人が既に三日前からパリ市中に入り、烈しい速度で市民の抵抗を破り、コミューンの残存勢力はベルヴィル、メニルモンタンの狭い地区に圧縮して追詰められ、ベエル・ラシェーズの墓地内で白兵戦が行われている最後の段階であつ

た。コミューン政府の司令部はアクソ街に移ったが他との連絡は断たれ、抵抗力は各所のバリケエドを守る必死の市街戦に分散され、指揮された正規軍の砲撃に身をさらしながら、なお死闘を繰返している時であった。

女も子供も銃をとって、バリケエドに出ていたが、勝敗はどこでももう見えている。この数日前、子供たちが成人と同じ大きな働きを市街戦で示し始めていた。フォーブル・デュ・タンブルのバリケエドでは一番痛烈な射手は、ある一人の子供であった。バリケエドが攻撃軍に奪取せられ、守っていた全部の者が壁に背をつけて敵の銃口の前に立つと、その少年が急に申出た。

「三分待つてください。家がすぐ前だから、銀時計をお母さんに渡して来る。お母さんに何もうなくなつては困るから。」

切実さが攻撃軍の士官の心を動かした。よしと言って放してやって、もちろん帰るものでないと見て、他の者を銃殺したところへ、ほんとうの三分間でその子供は帰って来て、銃殺された仲間の死体が地面に散らばっている壁に素直に背中を付けて言った。

「おれ、帰って来た。さあ。」

究極の段階に来て、セーヌの左岸は全部、攻撃軍に占領せられ、バスチーユ広場とシャトオ・ドオ(現在の共和国広場)が、戦闘の中心に成った。正午頃、区役所でコミューンの幹部が集った。前夜、アメリカ大使の使者と称する男がヴァンセンヌの森に駐屯するドイツ軍が居中調停きょちうていに入るから、休戦協定をまとめる為にコミューンの側からも代表をヴァンセンヌに出すようにと申入れて来てあった。これ以上の悲惨な犠牲を出したくない、と多くの者の心に影がさしていたところ

である。委員会はこれを討議した。ドレクリュウズは嫌惡の色を示した。ヴェルサイユ軍が勝つと決定した瞬間になって外国軍が仲介して休戦を結ばせる筈がないと信じたのである。他の者は水に溺れた者が藁にもすがりつきたい心理で、ヴァンセンヌの森に特使を出すことに決議した。ドレクリュウズも一行に加わるように要請された。

委員の一行は、ヴァンセンヌ城門まで来た。五月二十五日の午後三時であつた。門を守る者たちが通行を許さぬので、名刺や中央委員の飾り帯を示して交渉したが、公安委員の通行許可証がないと通さぬと言ひ、紛糾した。

議論の最中に、自分たちの同志の労働者が駆け集つて来て、「どこへ行く」と咎めた。「ヴァンセンヌの森へ」と答えたので、殺氣立っていた人々は味方を裏切つて逃亡しようとするのだと、たけり立つて取りかこんだ。誰かがドレクリュウズを知っていて、「ドレクリュウズさんではありませんか」と尋ねた。コミュニケーションの同志中でも指導的な地位に在り、高潔な人格を信服されていたひとである。その為に、傷害の危険は去つたが、味方から離れて敵のドイツ軍のいるヴァンセンヌの森に行く意図を人は疑つた。壕にかけたはね橋をおろすのを実力で妨害した。

公共の利益の為に行くのだと説いても、承知しない。嘲罵と威嚇で包囲した。戦闘の終りの段階に迫いつめられていることで味方を棄てて逃亡するものと疑つて、ドレクリュウズがコミュニケーションの指導者だろうが、許さぬのである。ドレクリュウズとしては心外のことだった。断念して本部に引返して来て、姉にあてて手紙を書き友人に託した。

「姉さん。僕と言う人間は、勝ち誇る反動に思ふままの玩具にされ生贅^{いけづえ}となることなど出来ない

し嫌悪することなのだ。命をささげて僕に随いて来てくれた君より先に死ぬことを許してくれ。これ以上、味方が敗北を重ねるのを見るに忍びない。可愛い君に接吻する。休息に入ろうとする最後の時に訪れて来る思いは君のことだろう。僕らのお母さんが死んでから僕に残った家族は君だけだ。左様なら、左様なら。もう一度接吻するよ。最後の瞬間まで僕は君を愛している。」

本部に宛てていた区役所の玄関前では敵の軍旗を分捕って来たと称して、驚をつけた旗を振って、さかんに味方に勇気を付けていた。負傷者が搬び込まれて来た。同志のポーランド人ウロブレウスキーが前線から戻って来たのに出会うとドレクリュウズは「僕に代って全軍を指揮してくれ」と依頼した。

ウロブレウスキーは尋ねた。

「一体、やってくれる人間は何千人ぐらい残ってる？」

「何百かな。」

「それは僕は引受けられない。このまま僕を一兵卒にして置いてくれ。それで闘って見せる。」

寄せ手の攻撃は接近し烈しさを加えて来た。建物を一軒ずつ、しらみ潰しに占領して肉薄して来た。

シャトオ・ドオの広場は大砲小銃弾のはやてにつつまれていた。広場の大噴水の獅子の像が横倒しになって落ち、家々の窓は火を噴き出した。バリケードには死体が重なり合った。

七時半頃にドレクリュウズが区役所を出てジュールドその他五十人ほどの同志とともにこの広場に向って歩き出したのが見えた。ドレクリュウズはフロックコートに黒色のズボンの平服、赤

色の飾り帯を巻いていたのも目立たぬ程で、武器を持たず、一本のステッキを突いていた。リサガレエは遠方からその姿を認め、広場に出てはただで済まぬと見て、後をつけた。近くの路面には、味方の死体が転がっていて、その中に負傷者も倒れていた。顔を知っている者が多い。作家で新聞記者のオギュスト・ヴェルモレルが傷ついた友人を支えて歩いて来て、人々の目前で自分が銃弾を受けて倒れた。テイスとジャクラーが駆け寄って搬んで来た。深傷である。

ドレクリュウズはヴェルモレルの手を握って励まして別れた。バリケエドに五十メートルの距離まで来た。そこは弾雨の中であつた。ヴォルテール街の入口で、落下した砲弾の煙で、ドレクリュウズとともに歩いていた人々の姿が一時隠れて見えなくなった。

「落日は広場のあなたに沈みかけていた。あとに離れて人が付けているのも振向かずドレクリュウズは同じ歩調でひとり前進した。生きている人間でヴォルテール街の中央の車道に見られる唯一の人影であつた。バリケエドに達すると、左ななめに歩いてから舗石を積上げた上に登って行った。威厳のある容貌が短く白い髭でかこまれて、死と向い合う姿がそれを限りとして我々に見えた。たちまち、ドレクリュウズの姿は見えなくなった。一せい射撃をあびて、バリケエドの向う側、広場に落ちたのであつた。」

数人の者が助けて来ようとした。四人の三人がその場に倒された。残った者は守る者もすくないバリケエドの蔭に逃げ込んだ。同志のジョアンナールが人の出ない車道におどり出て旗を振上げ、憤怒に泣いて人々を叱咤した。

「そんなことで、コミュニケーションの防衛が出来るか。」